

川口 ひろ子

ザルツブルク、バイロイト等、欧州各地では毎年夏のバカンス期に多くのオペラフェスティバルが開催される。昨年はコロナ禍の為見送りとなりファンを失望させたが、今年（2021年）は開催となった。7月、南仏エクサン・プロヴァンス音楽祭でモーツァルトの「フィガロの結婚」が上演され、翌8月には、オンデマンドで、渡航禁止下に居る世界のオペラファンの為に無料配信された。嬉しい事、勿論私も視聴した。

伯爵家の下僕フィガロと小間使いのスザンナは結婚の予定。ところが伯爵は一度破棄した初夜権を復活させてスザンナに……と、パワハラ全開だ。フィガロは次々と起こるこれら「困った」をあらん限りの知恵を出して解決し、晴れて結婚式を迎える、というお話だ。

充実していた演奏面に対して、来年ウィーン・フォルクスオーパーの新監督に就任予定のロッセ・デ・ベアーによる現代版舞台への不満は多い。現在最も旬な若手女流演出家は今という時代に何を発信したいのかが解明できず、私の頭の中は大混乱だ。「解らない 解らない」と喚いていると同好の土K氏が助言を下さった。彼は別途配信された予告編を視聴して、監督の企画趣旨を聞いている。

キーワードは「#MeToo 運動（女性からのセクハラ告発運動）」。思ってもみなかった展開だ。オペラ「フィガロ」の中では、伯爵など上流階級のセクハラ、パワハラを、女性や使用人など、弱者たちが身を寄せ合って跳ね返したけれど、現代女性はSNS等で「MeToo」と発信して事実を明らかにして世間に知らしめている。ロッセ新監督の主張はこの様なものか？

フィナーレでは、伯爵以外は全員が「MeToo」のロゴのついた衣装を着ているとのことであるが、私のパソコンの小さな画面からはこの文字は薄地の衣装の襞の下に隠れてしまい、発見出来なかった。

欧米の専門家筋からのこの演出への評価は低いとのこと。さもありません！ 何れにしても私の悩みは解決、胸のつかえが消えて、気分よく眠りについた。